

「好景気の名称」

日本経済の歩みの中でよく引用される戦後の「好景気の名称」について説明します。

1. 好景気の名称

1955年から1973年までに日本経済は、世界に例のない高度成長期に入り、日本の実質経済成長率は年平均10%を超え、欧米の2から4倍にもなりました。好景気等については、マスコミが呼び名をつけています。

期 間	呼び名等	期 間	呼び名等
1954年～1957年	神武景気 (31カ月)	1965年～1970年	いざなぎ景気 (57カ月)
1958年～1961年	岩戸景気 (42カ月)	1986年～1991年	バブル景気 (51カ月)
1962年～1964年	オリンピック景気 (24カ月)	2002年～2008年	いざなみ景気 (73カ月)

2. 主な好景気の内容

(1) 神武景気 (1954年12月～1957年6月の31カ月間)

高度経済成長期の幕開けとなった景気で、日本の国始まって以来（神武天皇以来）の好景気という意味で命名されました。この好景気によって日本経済は第二次世界大戦前の水準を回復し、1956年の経済白書には「もはや戦後ではない」と記されたことで有名です。また、「三種の神器^{*1}」の家庭電化ブームの端緒を開き、大衆消費社会形成の糸口となりました。

(2) 岩戸景気 (1958年7月～1961年12月の42カ月間)

神武景気を上回る好景気ということから、神武天皇をさらにさかのぼる「天の岩戸神話」にちなみ命名されました。活発な技術革新により「投資が投資を呼ぶ」という設備投資主導の景気拡大が生まれ、同時に「三種の神器」が急速に普及しました。1960年12月には国民所得倍増計画が発表され、本格的に高度経済成長の時代へ突入しました。

(3) オリンピック景気 (1962年11月～1964年10月の24カ月間)

1964年10月に東京オリンピックが初開催されることに伴い生まれた好景気のことです。新幹線や高速道路、競技施設の建設やオリンピックを見るためにテレビの需要が高まったことにより景気が拡大しました。

(4) いざなぎ景気 (1965年11月～1970年7月の57カ月間)

戦後最長の消費主導型景気拡大局面のことで、「天の岩戸神話」よりさらにさかのぼる「国造り神話」から命名されました。民間設備投資に牽引され、5年間で名目国民総生産（GNP）が2倍以上となり、1968年には西ドイツを抜き自由世界第2位となりました。さらに「3C（新・三種の神器）^{*2}」が急速に普及しました。

(5) バブル景気 (1986年12月～1991年2月の51カ月間)

過剰な投機熱により株式や不動産などの資産価値のバブル現象を引き起こし、その後の失われた10年と呼ばれる超長期の不況の原因ともなった景気のことです。

(6) いざなみ景気 (2002年2月～2008年2月の73カ月間)

「いざなぎ景気」を1年4カ月上回る景気拡大であり、「国造り神話」の女神である「いざなみ」から命名されました。好景気の恩恵が偏ったことと経済成長が緩やかであったことから豊かさを感じない好景気の特徴です。

※1 「三種の神器」とは、冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビの三つの家電製品のことで。

※2 「3C（新・三種の神器）」とは、カラーテレビ、クーラー、自動車の3種類の耐久消費財のことで。

閑話ひとつ

- ▶ 今までのところ、まとまった雪も降らず、今季は私がこれまで経験した中で最も暖かい冬になっています。寒さが苦手な私にとって、暖冬はむしろ歓迎すべきことなのですが、事態はそう単純ではないようです。
- ▶ 今年の1月に天栄村で開催された「2020スポーツ雪合戦東日本大会」では、雪不足のため、雪球の代わりに硬式テニスボールを使わざるを得なくなり、また下郷町で2月開催の「大内宿雪まつり」でもかまくら作りが中止となるなど、暖冬は県内のイベントや観光業に大きな影響を及ぼしています。
- ▶ さらに、暖冬の影響は冬だけにとどまらないかもしれません。雪解け水の一部は川に流れ、ダムにたまり、農業や私たちの生活で使われる水になっているため、今後の水不足につながる恐れもあります。しかも、今年の夏は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、例年よりも多くの訪日外国人が予想されますので、暑さ対策だけではなく、先行きを見通した早めの水不足対策が求められます。 (KW)